The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

六朝文人伝

――「晋書」潘岳伝――

坂元悦夫

潘岳[1]、字は安仁、滎陽郡（河南省）中牟県の出身である。祖父は瑾、安平郡（河北省）の太守であり、父は芘、琅邪（山東省）の内史[2]であった。

潘岳は年少より、才智[3]があると称美され、村里の人々は「奇童である」と尊しあい、「前漢の終軍、賈誼[4]のたぐいである」と評価した。

早くも司空太尉（賈充）の府に招聘され、秀才に推挙された。

泰始年間中（二六五―二七四）、武帝司馬炎は、みずから農業推奨の儀式を敢行したが、潘岳は賦[5]を作って、そのありさまを讃美した。以下のように頌めうたう。

それは、晋の泰始四年正月丁未[6]、武皇帝は親しく諸侯を率いて、郊外千畝の田にみずから鍬を入れられた。豊作を願う古来からの儀式である。そこでまず、儀式担当役人に畿内を清めさせ、交通担当の役人に道路を清掃させ、国境警備の役人に行宮を造営させ、宿舎担当の役人に、周囲に柵を取りつけさせた。青壇はこんもりと高く立ち、翠幕はくろぐろと雲のように、張りめぐらせる。祭壇の基礎は、がっしりと高く造られ、四方に広い階段が架けられる。沃野は地味豊かに、肥えた土地は、平らかに広がっている。洛水と川からは、流れが引かれ水が注がれて、遠き田のあぜ道も飛ぶ矢の如く、まっすぐである。青き牛に青色のくびきを着け、紺のながえに黒いすきをつけ、その牛の引く車を田のそばにおごそかに止め、天子武帝がみずから耕されるのを待つ。

それに先立って百官を職務に応じて配置するが、上から下に至るまで、すべて武帝の命ぜられた臣下であり皆青々とした輝くばかりの春服を身につけ、帝の従車がからからと進むのにつき従う。かすかな風が、はためく車のほろに加わり、細やかなほこりが、朱色の車輪にわき上がる。やがて臣下たちは盛大にそれぞれ玉の柄でできたひしゃくを捧げて、爵位ごとに整列し、厳粛に帝の車を待ち望む。それは、あたかも繁くおりた露（臣下）が、朝の輝く陽光（帝）にあって乾くようであり、また満天のふる星が、北極星の周囲を巡っているようでもある。

そこで、先導の車が魚群のように列をなし、後発の車が魚の鱗のように重なり続くと、洛陽城の闔闔門（及び他の二門）は、大きく開かれ、三街道に大型の馬車が並ぶ。この帝の車は、常伯[7]が添い乗りし、太僕[8]が手綱を取る。后妃は種（おくて）・稑（わせ）の種を奉り、農林大臣は栽培の用具を持ち、挈壺[9]は進行の時刻を調整し、侍従長は城門の警護を取りしきる。

天子武帝はと言えば、玉で飾られ華蓋に覆われた車に乗られ、佩

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

玉はりんりんと鳴り、絹の衣はさやさやとすれ合う音を出す。黄金の車はきらきらと輝き、龍のごときお召し馬は、勇み嘶いて威厳に満ちている。（続く）車は、南を象徴する赤、北を象徴する黒、東の青、西の白色の旗を、それぞれなびかせているが、中央を表わす黄色の旗はひときわ輝きを増し、様々な色もようは紛々として入り乱れている。（天子武帝の）五台の車は鈴を鳴らし、九つの旗は高く掲げられ、玉で飾られた矛は乱れ立ち、のぼりは林立して風にたなびく。笛の音はひゅるひゅるとさわがしく、太鼓はどんどんと轟きわたり、鐘掛けは高くそびえて進み、大鐘は彼方にまで鳴り響く。ずんずん、がらがらとどよもす車馬の巻き起こす塵埃[21]は、舞い上がって天にまで広がり、かくして藉田に行幸される。従者の冠は灼灼と輝き、その碧玉はきらきらと光っている。それは夜光の玉が荊山の璞から現出した如く、また生い茂った松が山の頂上に立っているかのように、輝き立派であった。

そうして、我が武皇帝は霊壇に姿を現わされ、すきを御手に持たれ、もり上がった土壤[22]に足を踏み入れられ、青き牛の手綱を手に取られる。そして三たびすきを推してやめられ、ただ人が後をついでその田畝を耕し終える。貴賤・官位の高低によって、或る者は五たび、或る者は九たびすきを推す。

この時になると、都鄙の別なく、華裔の別なく、老いも若きもこもごも集まり、男子も女子も我も我もと皆やってくる。粗布を身に着けていたり、裾しか整えていなかったり、髪を垂らしていたり、髻を束ねていたりして、あらゆる人々が踵を接し、肩をふれ合いながら、裳裾を引き袂を連ねながらやってくる。この雑踏で、黄塵は辺り一帯にわき上がり、日の光もぼんやり陰ってしまう。感激のあまり、体を動かし歓声をあげて拝観した人々は、みな街角でも手を拍って喜び舞い、この天子の御世を謳歌している。彼らは、まことに勤労を心から楽しみ、農事に尽力することを誓うであろう。誰からの催促も無く、いつまでも働き、課せられなくても、自分自身から農事に励むであろう。これは、皇帝みずからが今日のこの日、民の労苦に先だって労働するのを悦ばれたからであり、刑罰を厳しくし、法制をきびしくしたからではないのである。

村の老人が進み出て、以下のように言った。

「私が思いますに、『捐』と『益』とが時勢に随うのは、道理からして常に言えることです。すべて高きものは、低きものを以て基とするように、民は『食』を以て『天』とみなしています。それ故、末（商）を正さんとする時は、本（農）を正しくし、後（商）をよくしようとする時は、何よりもまず先（農）を慎むのです。

さて、九州それぞれの土地に合った産物を貢賦とせず、或いは、士農工商[23]がそれぞれの任務に励まなければ、庶民には飢餓のようすが現われ、役人には秩禄の米が渡らなくなります。穀物を蓄えて天災に備えることもせず、ただいたずらにその秋の実りをあてにしている。夏殷周が衰亡したのは、全てこのためです。しかし今や、我が君は早朝よりご政道によって、徳を現わされ、夕刻までご自身を慎み畏れられ、豊作の時にも窮乏の事態を考えられ、安楽な時にも倹約することを、念頭に置かれています。慎み憂えて、ただ農事のことばかりをご心配なさっています。春耕・夏転・秋収の大きな任務を説かれ、倉廩を穀物で一ぱいにする――まことに帝堯・湯王の腐心したことであり、国を保ち民を救う要術であります。」

ところで、神官がその吉日を占って、宗廟で祭りを催し、祭器に

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

黍稷が一ぱいに供えられ、香り酒を蕭茅でこせるのは、この籍田の儀式によって、穀物が実るからである。やがて黍稷は香ばしく実り、美酒とよき穀物が生まれるであろう。民が豊作を喜び、神が福を下されるのも宜なることである。

古人は「聖人の徳は孝に勝るもの無し。」と言っている。そもそも「孝」とは、天の賦与した本性であり、人がそれによって霊たりうるものである。むかし、聖明なる君は「孝」によって天下を治めたが、それを継いだ君主は、何と希少であることだろう。しかるに我が皇晋の君に及ぶや、まことにこの「孝」なる道を明らかにされ、範を万国に示され、ご先祖に仁愛と畏敬との念を奉げ尽くされた。それ故、ご自身で藉田にくわを入れられて、実った黍稷を宗廟に供えられるのは、ご先祖に「孝」を尽くされることであり、農を勧奨して民に食を十分にされるのは、「根」を固めることである。「本」を固めることができて、「孝」を尽くすのは、盛徳ある大業の最たるものである。この籍田の儀式は、二つの美点（「本」＝農と「孝」）を明らかにしたのであり、何と深遠にして荘重なることであろうか。

私は頌を作って歌う。

ああ、楽しいかな、王の国土よ、ここにその香りよき花を摘む。大君はお出ましになって、ここに籍田の礼を挙行される。あなたが鋤で三たび土を掘り起こされると、万邦の民はみな敬い慎む。まず公田の土を掘り返して、そのまま私田に行かれる。（それは実りの秋をもたらして）祭器には稲粱が、礼器には黍稷が盛られるであろう。我が晋朝の廩倉は、山や丘のように膨れるであろう。武皇帝は、籍田の礼を敢行されて、農を重視し、ここにとわに「孝」を尽くさんことを思われる。民の力はあまねく存し、神官は言を正して告げる。天と地の神がそれを受諾されると、与え給う逸楽ははかり知れない。我が君に善事あれば、万民ひとしくその余慶を受けるであろう。

この作品によって潘岳の名声は、一世に冠絶するところとなったが、却って衆人の反感を買い、[14]そのまま十年間、官職を離れていた。

やがて地方に出て河陽県（河南省）の県令となったが、内心、才を自負して鬱々として満足することができなかった。[15]おりしも尚書僕射であった山濤[16]は、吏部を統轄していて、王済・裴楷[17]らとともに、武帝の厚い信頼を受けていた。潘岳は、内心でそれを非難し、渡殿に題して戯歌[18]を作った。

「渡殿の東に大きな牛（山濤）がいる。王済は鞅、裴楷は鞧、和嶠[19]はあくせくして休むこともできない。」

やがて懐県（河南省）の県令に転じた。

その頃、「逆旅」（私営の旅館）に、商売をやろうとして農業を止めてしまった者、定められた住所から域外に逃げだした者などが、多く寄り集まって法制を破り乱していたので、勅令で撤去することになった。そして十里ごとに官営の宿泊施設を置いて、貧しい家の年寄りや年少者に番をさせ、その上で役人を派遣―管掌させて、その施設から宿泊費を徴収しようとした。

潘岳は建議して以下のように述べた。

謹んで考えてみるに「逆旅」は、起こってすでに久しい。旅行者はそれをあてにして投宿し、経営者は安い代金を徴収し、交易行商する者、双方に求めるものを与えている。[20]官吏が民を使役したり、租税を取りたてたりすることも無いのに、民自身が（我々

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

の役所に）利益を作り出してくれている。恩恵は民に加わり、我々役所にはつまらぬ費用がかからない。

語に「許由は帝堯の（天下を譲るという）命令を辞退して、『逆旅』に投宿していた」と言っている。また『国語』[21]に「晋の陽處父は甯に立ち寄った時、逆旅に泊まった」と言っている。魏の武帝（曹操）も同じく「逆旅」を是として、その詩[22]で「『逆旅』を整え設けて、商人を活動しやすくしてやる」と述べている。つまり、唐堯の時代より当今まで、未だ「逆旅」を必要としない制度はなかったのである。ただ商鞅だけがこれを非難しているのは[23]、まことに聖人の治める世の発言ではない。

今や、四海から諸公が都に参集し、九服から貢物を納めに来て、天下は和らぎ、公私の旅する者が路に溢れている。都近辺は（人と物とが）聚まり、どの旅館も同じく満員である。冬には暖かい客室、夏には涼しい日陰があり、馬のまぐさは山とあり、必要なものは十分に得られる。疲れた牛馬も必ず休まんとして、涼しさにひかれて近ずいてきて、首にくくられた槁（くびき）をはずされ、鞍（くら）を下ろされて、皆休息することができるのである。

また、そもそも強盗は、すべて人の少ない場所で為されて、人の多い場所では為されない。十里にわたってもの寂しければ、邪悪な心が内に生じ、町々に旅館を連ねれば、盗人（ぬすと）心も消え失せてしまうだろう。その上、もし旅館の者が、強盗に襲われた旅人の叫び声を聞けば、救出できるし、強盗がすでに逃げ出した後なら追うこともできる。救出しないと罪になるし、追わない時も同様だからである。乱暴を禁じ、逃亡する者を逮捕するには、いつでも通報すべき係官がいる。すべてこれらは、皆旅館の利点であって、官営の施設にはないものである。

また、旅行者は道中を急ぐので、米を買い求めて煮焚きするのは、早朝と日没後である。真夏は日中暑いので、（日のある時はもちろん）夜間も歩き続け、早朝（宿場に到着しても）官営旅館は門を閉ざしているのでよりつかない。或いは、夜間、閉館されているのを避けて、道ばたをウロウロしてしまうが、まさにこれは「倉庫の戸締まりをおろそかにするのは、泥棒に盗めというようなものである」[24]のお手本である。

もしも、私営旅館がしばしば法と教とを破り、役人が官営旅館を正しく運営できるというのであれば、それができるのは一体誰なのであろうか。あの河橋（河南省）や孟津（同）では、旅行者に銭を出させて券を与え、優秀な役人が取り締まり見守って、入る者と出る者とを数え比べ、さらに長官が両岸でたがいに取り調べても、なお見落としを恐れている。それ故（正確さを期して）金銭を懸けて与え、功報を出すことも許可している。

もしも、小役人、或いは年寄りや年少者が、官営旅館の宿泊税を独占し、開閉の権利を管掌し、無比の勢力を有してみずからを頼むようになれば、それは道路の木食い虫、不正利得のはびこることになろう。逆に歴代の旧習に従って、旅して逗留する者の歓心を得、客室をきれいにして、彼らを迎えて好きな所に泊まらせることは、まことに大衆の一途に望むところである。

潘岳が担当官庁に願い出て奏上させたところ、朝廷はそれに従った。潘岳は二県を続けて治め、政務に励んだ。やがて尚書度支郎に任ぜられ、さらに廷尉評に遷ったが「公事」によって免職させられてし

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

まった。

楊駿[26]が（太傅になって）朝政を統轄した時、彼は補佐の役人を抜擢し、潘岳を自分の主簿とした。やがて楊駿は誅殺されて、潘岳は官爵を剝奪された。

その初め、譙県（安徽省）の人、公孫宏は若くして孤児となり貧しく、河陽県に移って耕作していたが、上手に琴を弾き、非常にうまく文を綴ることができた。岳は河陽の県令であった時、彼の才芸を愛し、甚だ厚遇していた。楊駿が殺された時、公孫宏は楚王司馬瑋[27]の（片腕とも言える）長史となって粛清政治を断行した。当時、楊駿の配下で幹部だった者は、皆連坐し、岳と同僚の主簿朱振はもはや殺されていた。岳はその夕刻、緊急な用で役所の外に出ていた。[27]公孫宏は、そのことを楚王に話して、「正規の主簿に非ず。」と言ったので、死罪から免れることができた。

ほどなくして長安令に選ばれ、「西征の賦」を制作したが、それは（洛陽から）長安に至るまでの道中にまつわる人と山水とを述べたものである。[28]表現は清らか、内容は深遠であったが、字数が多いので載録しない。

やがて召されて博士になる予定であったが、辞令が下る前に母の病気を理由に、長安令の職を離れたので、解任された。ついで著作郎となり、散騎侍郎に転じ、給事黄門侍郎に遷った。

岳は、性質軽薄でおちつきがなく、世俗の利に趨った。石崇[29]らと賈謐[31]に追従して、いつも彼が外出するのを窺っていて、石崇とともにその車塵を望んで拝んだ。[32]愍懐太子を陥れた文章[33]は、岳の手になるものである。賈謐の二十四友[34]で、彼はその筆頭であった。賈謐の「晋書の限断」[35]も、また彼のものである。岳の母は、しばしば彼を叱責して言った。

「あなたは『足る』ことを、知らねばならない。十に一つの目前の利に目を奪われて、後のことを考えようとしないのですか」と。しかし、彼は最後まで改めることができなかった。

仕官してしまっていたが、本意には遠く、そこで「閑居の賦」[36]を作って、以下のように述べた。

私は、これまで『史記』の汲黯伝を読んでいて、司馬安が四度九卿となり、司馬遷がそれを書き綴って「巧みなる官吏」と評価するところまでくると、必ず深いため息をついて、書を置いて歎くのであった。「ああ、巧みに生きる人も確かに存在する。（それなら）拙い人もきっといる筈だ。」と。私はふり返って常に思う、男子が生を稟けるや、聖人にして跡を残さないような善行を積み、深く理に通じ道を得るような者でないならば、必ず功を立て業績を積んで、当今の役にたとうとするものである、と。それ故、忠と信とを履み行なって徳を進ませ、言語を修得し、誠実さを確立して、自己の任務を守っていくのである。

私は年若くして、郷里の人々の栄誉をいただき、恐れ多くも司空となり太尉に転ぜられた方の、ご命令を受けた。お仕えした主は、つまり太宰であられた魯の武公（賈充）その人である。やがて、秀才に推挙されて郎となった。世祖武皇帝（司馬炎）にお仕えしてから、河陽・懐、両県の県令、尚書郎、廷尉評となった。今の天子（恵帝）が喪に服されている時は、太傅の主簿を兼任していた。太傅の主（楊駿）が誅殺されると、官爵を剝奪されて平民となった。しばらくして官職に復帰し、長安令に任命された。やがて博士に遷る筈であったが、まだ召還されないうちに、母親

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

が病にかかり、免官された。二十歳より五十歳の今日まで、八度官職を遷し変えられたが、内訳は、一度昇官し、二度免官され、一度官爵を剝奪され、一度は任命されるも着任せず、横すべりは三度、というだけのことであった。運不運には則があるというものの、やはりまた私の拙きことの証しである。

昔、博識の人和嶠（長輿）が、私のことを論じた時に、むろん「多くの仕事をこなすことに、巧みではない。」と言った。多くの仕事をこなすというのは、もともと私のやろうとすることではない。「巧みではない」というのは、その通りであって、今までに徴候があった。現在、俊英が官職にあって、役人たちもうまくやっている。人生に拙い者は、栄達する事から意を断つのがよかろう。母君は生きてはおられるが、老衰の病にかかっている。それなのに、どうして親のもとで孝養するのをやめて、あくせくとして薄給の任務に従っておられようか。

そこで私は、今の境遇にとどまり、満足する生き方を望み、不義なる富貴は、我に関せじという志を願って、住まいを築いて周りに木を植え、気ままにぶらついて平安な満ち足りた日々を送ろう。池や沼は、魚を釣るのに十分だし、臼ずいて得た利益は、給金とするのに十分である。菜園に水をそそぎ、採れた野菜を売って、朝夕の食事をやりくりし、羊を飼いバターを売って、夏と冬との費用にあてる。「尚書」に「ああ、大切なことは孝行することだ。父母に孝であって、兄弟は仲睦じくなる。」とあるが、これもまた拙き者の政治なのである。

そこで「閑居の賦」を作って、事を歌い、真情を述べた。

伏羲・神農・黄帝の古書、孔子の古典のよき世界に遊び、先賢の示された高き道を歩んでみる。私がどんなに厚顔だとしても、内心では、やはり出処進退に則のあった、寧武子や蘧伯玉に深く恥じ入る。世が平和な時でも、蘧伯玉のように仕官することはできず、乱れている時でも、寧武子のように愚鈍を装うことができなかった。なんと巧智に乏しく、拙さゆえに苦しんで余り有る自分であったことか。

そこで、私は俗世を退いて、洛水のほとりに閑居することとなった。身は逸民と同じ、名は士族の末端に連ねている。当地は洛陽に近接して、伊水に向かい、城郭の外に面して、市内を背景にしている。洛水にかかる浮き橋は、延延として対岸に通じ、彼方の天文台は、空をついて高くそびえている。天子は、ここで日月星辰の運行を観察され、世の一切の現象を考究されるのである。

住まいの西には、戦車群と近衛兵の営舎が並び、黒い幕が張りめぐらされ、緑の軍旗がはためいている。谿子・巨委の石弓は所定の位置に据えつけられているが、発射ばねは同じである。一たびはじき飛ばされた石は、雷の如く大音響をあげ、一斉に放たれた矢は、虻の如く音をたてて飛んでゆく。それらは、進撃の先頭にたって、我が皇軍の威力を輝かすのである。

東には明堂・辟雍など、祭政を施行する建物があり、広々として静謐さを漂わせている。周囲の林は、長く続いて水面に映え、その水は流れて円状に巡っている。天子は、ここで孝をつくして父君の霊を尊ばれ、先祖の晋の文王を尊んで、天と等しく祭られる。聖徳と敬慎との道によって、従順たることを明らかにし、長老たちへの孝養を積まれて、老人に対する崇敬の念を示される。

冬が終わって春となり、陰気がたち去って、陽気が移り昇ると、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

天子は、柴を焼いて天を祭り、祖先を祭って徳義を百姓にゆきわたらせられる。天上の妙なる音楽が演奏され、千の兵車、万の騎馬がならぶ。兵士の軍服は堂々[27]として黒一色、楽団の笛の音はぴぴと合わせ吹かれる。きらきらとまばゆく、揚々として盛大であり、これぞ壮観なる礼の儀式、王者の壮大なる美である。

国学と大学との校舎は並列して建てられ、双方の屋根は、あたかも一つのように見える。西の国学では、卿大夫らの嫡子を訓育し、東の大学では、民間の俊才たちを入学させている。多数の学生や儒者のたまご達、（彼らの中には）堂に上るところまでの学力を培った者もいれば、更に進んで奥の室に入るまでに達した者もいる。[28] 教育には、決まった師など必要ではなく、道を備えさえしていれば、その人が師となる。故に、俊才らは印紱を投げ出して職を辞し、名王は印璽を懐にしまって、政を中断してやって来る。両学での訓育は、風の吹き及ぶが如く、彼らの反応は、ちょうど草がなびくが如くである。[29] これこそ、孔子が仁者の村里に住むのをよしとした理由、[30] 孟子の母が居を三遷してまで教育した理由である。

私は、ここに居を定めて、家を築き池を掘った。長い柳の姿は、池沼に映り、芳しい枳の木は籬として植えた。池では、魚は水底に潜ったり、水面近くにその姿を見せたりして泳ぎ、蓮の花は水面せましと敷き広がっている。竹や樹木は鬱蒼として茂り、珍しい果実は、大小さまざまの姿を見せている。張公の大谷の梨・梁侯の烏椑の柿・周の文王の弱枝の棗・房陵の朱仲の李など、全て植えられていないものはない。侯桃・桜桃・胡桃は、それぞれ固有の実をつけ、赤い柰と白い柰もおのが花を輝かし、珍しい石榴や蒲桃が、かたわらで枝もたわわに実って、延び広がっている。梅・杏・郁・棣なども満開に花咲き麗しい色どりを示し、花と実が照り輝くようすは、とても言葉で極め尽くせない。野菜では、ねぎ・にら・にんにく、さといも・青荀・紫薑があり、（中でも）堇と薺は美味、蓼やこえんどうは、芳香を漂わせている。みょうがは、日陰に生え、豆の葉は、陽光に向かって伸び、緑なる葵は露を含み、白きおおにらは、霜を背負っている。

さて、夏の暑さが逝った凜とした秋の日、あるいは、冬の寒さが去ったおだやかな春の日、霧雨もあがったばかり、空は晴れて、天地はさわやかに明るい。母君は、板で作られた輿に、あるいは軽やかな車に乗られて、遠くは郊外を観賞され、近くは我が家の庭園を周遊される。身は、行楽することによってくつろぎ、薬は体を動かすことによって効き目が現われ、食欲も増加し、長年の持病もよくなってきた。そこで、長いむしろを敷きつめて、孫や子どもらを列席させ、柳の枝が日陰をつくっているあたりに、車を停車させる。陵では紫色をした果実の房を摘み、川や池では赤い鯉をつりあげ、林の間で宴を催し、水辺で禊をとり行なう。白髪まじりの兄弟たちも、あどけない幼な子たちも、母君の長寿を祝して、万歳を称して祝杯を傾ける。誰もが、時には母君の行く末限りあることを心配し、時には、その長寿たられることを喜ぶのである。祝杯が挙げられると、母君の慈顔は和らぐ。人々は、流れに杯を浮かべては楽しく飲みほし、管絃が合奏されると、足を踏み鳴らして、立ちあがって舞い、声を張りあげて高らかに歌う。人生が安楽であれば、一体誰が他のことなど考えるだろう。

官を退いて、全てを自己に求めて三省してみるに、私はまことに

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

功と用は少なく、才能は劣っている。今後は、周任の格言[42]を守って、力の限りを尽くしてまでして、官職につくことはやめよう。つまらぬ我が身さえ保持しかねているのに、どうして古の賢人に習って生きることができようか。老子の説いた「衆妙」の道を仰いで、俗念を絶ち、どこまでもゆったりして、我が「拙き」人生を大切にしてゆこう。

その初め、父の潘芘が琅邪の内史であった時、孫秀[43]はその小役人であって、潘岳にも仕えていたが「狡猾みずから喜ぶ」というような人物であった。潘岳は彼の性質を嫌悪し、しばしばむち打って辱ずかしめたので、孫秀の方も常に反感を抱いていた。[44]

趙王司馬倫[45]が相国となって朝政を掌握すると、孫秀は中書令となった。潘岳は庁内で孫秀に向かって「孫大臣、やはり昔の私の行為を覚えておられましょうか」と言った。孫秀は「詩経」の句に託して「中心これを蔵す、何れの日かこれを忘れん」[46]と答えた。潘岳は、そこで自分自身逃れることはできない、と悟った。しばらくして孫秀はついに、潘岳・石崇・欧陽建[47]らが、淮南王司馬允[48]と斉王司馬冏[49]とを奉じて反乱を企てている、と誣告した。そして、彼らを誅殺し、一族もろとも皆殺しにしようとした。[50]

潘岳は、刑場に連行される間際、母と別れんとして、「母君に背いてしまいました」と言った。初め、身を拘束された時、お互いは知らなかったが、石崇がまず刑場に護送され、岳が後にきたので、石崇は、「安仁よ、やはり君もこうなったか」といった。潘岳は、「『白首まで帰する所を同じくせん』ということさ」と答えた。潘岳の「金谷集詩」（『文選』巻三）に「分を投じて石友に寄す、白首まで帰する所を同じくせん」と言っている。乃ちこの前兆が事実となったのである。[51]岳の母、兄の侍御史の釈、弟の燕県（河北省）令の豹、同じく司徒掾の據、據の弟詵、兄弟らの子、すでに嫁がせていた娘達、長幼の別なく一時に殺害された。ただ釈の子伯武だけは、この難を逃れて助かることができた。また豹の娘とその母親は、互いに抱きあって号泣し、解きはなすことができず、たまたま詔勅が下って許された。

潘岳は容姿美しく、詩文も絶麗、もっとも巧みに死者を哀悼する文を作った。[52]若き時、いつも弾き弓をわきに挟んで、洛陽の街路に車を走らせると、婦人でこれに遭遇した者は、みな手をつないで取り囲み、車に果物を投げ入れた。彼は、とうとう車いっぱいに果物を積んで帰ってきた。一方、張載[53]はひどく醜く、外出するたびに、子どもらが瓦や石を投げつけ、疲れきって帰ってきた。[54]

潘岳の従子に尼がいる。

注

① 潘岳に関する研究は、「潘岳小伝」（原田憲雄　雑誌『方向』五、六）、「潘岳論」（高橋和巳『中国文学報』七）「潘岳の伝記」（松本幸男『立命館文学』三二一）「潘岳年譜稿」（興膳宏『名古屋大学教養部紀要』一八）「西晋詩人潘岳的生平及其創作」（李長之『国文月刊』六八）などがある。また書籍としては、「潘岳・陸機」（『中国詩文選』一〇　興膳宏、一九七三年筑摩書房）がある。

② 父芘琅邪内史『世説新語』仇隙篇注、また『文選』巻二〇「金谷集作詩」李善注、各々引く『王隠晋書』は、「岳父文徳、為琅邪

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

太守」としている。「内史」「太守」の文字の移動は、「晋の時、郡には太守を置く。王国には則ち内史を置きて、太守の事を行はしむ」（『二十二史考異』二一）ということであり、「互称」らしい。（『晋書斠注』）また「文徳」は芷の字であったと考えられる。

（同）

③才穎　『文選』巻七「籍田賦」李善注に引く『蔵栄緒晋書』の「岳総角弁恵、擅藻清蘊、郷邑称為奇童」或いは『世説新語』文学篇注に引く『晋陽秋』の「夙以才穎発名、善属文、蔡邕未能過也」などの記述から推測すると、具体的には「弁論」の才と「文章創作」の才とを指すものと思われる。

④終軍・賈誼　ともに幼少より聡明な人であった。本伝はそれぞれ『漢書』巻六四、『史記』巻八四、或いは『漢書』巻四八。

⑤賦　『文選』巻七に「籍田賦」として載録している。

⑥正月丁未　李善が『晋書』武帝紀を引き、孫志祖が『礼記』月令を引いて、考証している（『文選考異』）ように、丁未は丁亥の誤りである。

⑦常伯　官名。王の行幸の時、その車に同席する。

⑧太僕　官名。王の車の御者となる。

⑨挈壺　官名。漏刻（水時計）を掌る。

⑩鹿霧　『文選』胡刻本に従って「麀鹿」として訳した。

⑪游場　『文選』胡刻本に従って「坻場」として訳した。

⑫四業　『文選』胡刻本に従って「四人」として訳した。なお「四業」とは「詩・書・礼・楽」の経書の修業を言う。

⑬時　『文選』胡刻本に従って「民」として訳した。

⑭為衆所疾　『文選』「籍田賦」李善注に引く『王隠晋書』には、この上に「高歩一時」の四字がある。

⑮出為河陽令負其才而鬱鬱不得志　この部分は『太平御覧』巻八九八に引く『王隠晋書』では、「潘岳出でて河陽の令と為る。任次は宜しく郎と為るべきを以て、意を得ず」となっており、地方官に飽き足りない心境が窺われる。

⑯山濤　字は巨源。老荘を好み、阮籍らとともに竹林の七賢に数えられる。『晋書』巻四三に本伝がある。

⑰王済・裴楷　それぞれ『晋書』巻四二・三五に本伝がある。

⑱題閣道為謡　この戯歌にまつわるエピソードは『世説新語』政事篇に見え、歌の作者を潘尼とする説をも加えている。「山公、以器重朝望、年踰七十、猶知管時任。貴勝年少、若和・裴・王之徒、並共宗詠。有署閣柱曰、『閣道東、有大牛、和嶠鞅、楷裴鞦、王済剔鬣不得休』。或云潘尼作之」注に引く『王隠晋書』に言う、「初、濤領吏部、潘岳内非之、密為作謡曰、『閣道東、有大牛、王済鞅、裴楷鞦、和嶠刺促不得休』」

⑲和嶠　『晋書』巻四五に本伝がある。

⑳交易貿遷各得其所　『周易』繫辞伝下「日中為市、致天下之民、聚天下之貨、交易而退、各得其所」の語句をふまえている。

㉑外伝曰　『国語』巻一一晋語五に、「陽處父如衛、反過甯、舍於逆旅甯嬴氏」とある。

㉒其詩曰　「其詩」とは『晋書』巻二十三楽志に載せる「碣石篇」（冬十月）のことである。

㉓商鞅尤之　例えば『商子』墾令に、「廃逆旅、則姦偽躁心、私交疑農之民、不行。逆旅之旅、無以食即必農、農則草必墾矣」とある。

㉔慢蔵誨盗　『周易』繫辞伝上に「蔵を慢にするは盗を誨へ、容を

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

冶るは淫を誨ふ」とある。

㉕楊駿　『晋書』巻四〇に本伝がある。

㉖楚王瑋　『晋書』巻五九に本伝がある。

㉗岳其夕取急在外　この事件を『文選』巻一〇「西征賦」李善注に引く『王隠晋書』は、「潘岳、為楊駿府主簿。駿被誅日、岳取急対人。朱振代夷三族」と記している。また本伝は言及していないが、『北堂書鈔』巻六六、また『太平御覧』巻四六五に引く『王隠晋書』によれば、太子舎人の職に着いたこともあるという。

㉘選為長安令作西征賦　『文選』巻一〇「西征賦」本文に、その制作時を「乙未御辰」と記し、李善はその間の経緯を「晋恵元康二年、岳為長安令、因行役之間、而作此賦。岳、家在鞏県東、故言西征」と注している、また「傷弱子辞」の序を引いて「五月、余之長安」と注し、その日時を、「以歴推之、元康二年、歳在壬子、乙未五月十八日也」と推察している。

㉙述所経人物山水　李善注に引く「蔵栄緒晋書」は、「述行歴、論所経人物山水也」となっている。

㉚石崇　『晋書』巻三十三に本伝がある。晋代きっての奢侈な貴族として知られる。

㉛賈謐　『晋書』巻十に本伝がある。

㉜与崇輒望塵而拝　この部分、石崇伝では「（石崇）与潘岳詔事賈謐、謐與之親善。……広城君毎出、崇降車路左、望塵而拝、其卑倭如此」と記している。

㉝構愍懐之文　『晋書』巻五三愍懐太（司馬遹）伝に収録されている。

㉞謐二十四友　賈謐伝には、二十四友の姓名が列挙してある。また石崇伝、劉琨伝（巻六二）も言及している。

㉟「晋書限断」　この文は今伝わらない。

㊱「閑居賦」　『文選』巻一六にも収録されている。またその題意について李善は、「此蓋取於礼篇。不知世事、閑静居坐之意也」と注している。

㊲振振　『文選』胡刻本に従って「振振」として訳した。

㊳或升之堂或入之室　『論語』先進篇の「子曰、由之瑟、奚為於丘之門。門人不敬子路。子曰、由也升堂矣、未入於室也」の語をふまえる。

㊴訓若風行応猶草靡　『論語』顔淵篇に、孔子が季康子の質問に答えて言っている。「子為政、焉用殺。子欲善而民善矣。君子之徳風。小人之徳草。草尚之風必偃」

㊵此里仁以所為美　『論語』里仁篇に、「子曰、里仁為美。択不処仁、焉得知」とある。

㊶周文弱枝之棗　『拾遺記』（「漢魏叢書」所収）巻三周穆王に、「（穆）、王東巡大騎之谷。西王母、与王共玉帳高会、進陰枝黒棗。北極、有岐峰之陰、多棗樹、百尋枝、莖皆空、実長二尺、核細而柔、百年一実。夫岐乃周文所居、当指此也」とある。

㊷周任之格言　『論語』季氏篇に、「孔子曰、求、周任有言、曰、陳力就列、不能者止」とある。

㊸孫秀　『晋書』巻五九に本伝がある。

㊹岳悪其為人数撻辱之　『世説新語』仇隙篇注に引く『王隠晋書』では、「岳父文徳、為琅邪太守。孫秀、為小吏給使、岳数賦蹋秀、而不以人遇之也」となっている。

㊺趙王司馬倫　『晋書』巻五九に本伝がある。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

㊻中心蔵之何日忘之　『詩経』小雅「隰桑」の二句である。
㊼欧陽建　『晋書』巻三三に本伝がある。
㊽淮南王允　『晋書』巻六四に本伝がある。
㊾斉王冏　『晋書』巻五九に本伝がある。
㊿誅之夷三族　『水経注』巻一五洛水注に、「羅水、又西北逕袁公塢北、又西北逕潘岳父子墓。前有碑、岳父芘瑯琊太守碑、石破落、文字缺敗。岳碑題云、給事黄門侍郎、潘君之碑。碑云、君、遇孫秀之難、闔門受禍。故門生、感覆醢以増慟、乃樹碑以紀事。太常潘尼之辞也」とある。
(51)乃成其讖　この一連の記述は、『世説新語』仇隙篇のエピソードを下地にしたものである。「孫秀、既恨石崇不与緑珠、又憾潘岳昔遇之不以礼。後、秀為中書令。岳省内見之、因換曰、孫令、憶疇昔周旋不。秀曰、中心蔵之、何日忘之。岳、於是始知必不免。後収石崇・欧陽堅石、同日収岳、石先送市、亦不相知、潘後至。石謂潘曰、安仁、卿亦復爾邪。潘曰、可謂白首同所帰。潘金谷集詩云、投分寄石友、白首同所帰。乃成其讖」と。また二人の刑場でのやりとりは、注に引く『語林』では、次のようになっている。「潘・石、同刑東市、石謂潘曰、天下殺英雄、卿復何為。潘曰、俊士塡溝壑、余波来及人」
(52)岳美姿儀辞藻絶麗尤善為哀誄之文　『北堂書鈔』巻六六設官部「太子舎人」に引く『王隠晋書』に「潘岳字安仁、神形清弁、能属文、為太子舎人」とあり、また同じく巻一〇二芸文部「誄」に引く『王隠晋書』に、「潘岳善属文。哀誄之妙、古今莫比、一時所推」とある。また『三国志』巻二一「魏書」衛覬伝裴松之注に引く「潘岳別伝」に、「岳美姿容、夙以才穎発名、其所著述、清綺絶倫、為黄門侍郎、為孫秀所殺。尼・岳文翰、並見重於世」とある。また『世説新語』容止篇注に引く「潘岳別伝」に、「岳姿容甚美、風儀閑暢」とある。また同じく文学篇に、「孫興公云、潘文爛若披錦、無處不善。陸文若排沙簡金、往往見宝」とあり、注に引く「続文章志」に「岳為文、選言簡章、清綺絶倫」とある。
(53)張載　『晋書』巻五十五に本伝がある。
(54)委頓而反　『世説新語』容止篇は、張載を左思（太沖）としている。「潘岳、妙有姿容、好神情。少時、挾彈出洛陽道、婦人遇者、莫不連手共縈之。左太沖絶醜、亦復效岳遊遨。於是群嫗斉共乱唾之、委頓而返」注に引く『語林』は張載とし、劉孝標がその差異を指摘している。「安仁至美、每行、老嫗以果擲之、満車。張孟陽（載）至醜、每行、小児以瓦石投之、亦満車。二説不同」

NII-Electronic Library Service